

## 競合する of と from の区別

深 谷 輝 彦\*

On the Distinction between the Competing Prepositions, *of* and *from*

Teruhiko FUKAYA

### 1. はじめに

同一の文法環境であるにもかかわらず、2つ以上の語句が生起可能である事実がしばしば指摘される。例えば、*between* と *among* の違いについてよく指摘されるのは、*between* が2者の関係、*among* が3者以上の関係であるという区別である。

- (1) a. Myra and Barbara sat in the back, the baby between them.  
b. Among his baggage was a medicine chest.

(1a)の場合、Myra と Barbara という2者の関係であるので、下線部は *between* のみが容認され、*among* では代用できない。(1b)が表すのは、3つ以上の多数の手荷物のなかに、薬箱が埋もれているという状況である。ところが *between* と *among* のこの区別が分配表現でははっきりしなくなる。

- (2) a. He divided his money among his brothers and sisters.  
b. Different scenes from the play are divided between five couples.

(COBUILD English Usage 2012: 42)

*between* を3者以上に使っている場合にそれぞれの個別性に重点が置かれるとして、ウィズダム英和辞典第3版は *a love triangle between three people* (男女の三角関係)をあげる。確かに三角関係の場合に2人ずつの個別性が重視されるという説明は説得力を持つ。ところが(2b)について、個別性という説明はどうも適用しにくい。実際に上記の COBUILD English Usage は(2a)と(2b)の *among/between* + 複数名詞句について、意味的相違はない、と言い切っている。つまり *between* と *among* は(1)ではその区別をはっきりと言い立てることができるものの、(2)の分配環境になると両者を識別するのが困難になる。

---

\* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

本稿では、次の3つの構文において英語前置詞 *of* と *from* の選択を大規模コーパス British National Corpus（イギリス英語約1億語）で調査する。

- (3) a. a table made of wood  
b. Paper is made from wood.
- (4) a. The animals died of starvation in the snow.  
b. patients who are dying from cancer
- (5) a. The school expects a lot of its students.  
b. The officer expects complete obedience from his troops.

以下の先行研究が示すように、下線部の前置詞 *of* と *from* が異なるのだから、(3) から (5) のペアの文は異なる意味を表すという意見と、そのような使い分けはあまりなく、どちらの前置詞でもよいという意見が対立している。本研究は、コーパスから作成した *of* と *from* の目的語リストから、問題の a 文と b 文の共通点と相違点を見いだそうという試みである。最初に先行研究から区別派と同一視派の議論を整理する。次に *made of/from*, *die of/from*, *expect sth of/from* の順で *of* と *from* の目的語リストを比較照合する。その結果、同種類の目的語、異種類の目的語を分別することで、両構文が重なるところ、重ならないところをはっきりさせることができる。最後に結論に至る。

## 2. 先行研究

当該の3構文で *of* と *from* を比較する前に、*of* の語源を探しておく。*of* は古英語の段階では空間前置詞で、‘away from’ という意味であった。時には ‘out of’, ‘from’, ‘off’ の意味を表現した。しかしながら、通時的变化の中で、空間的意味が失われ、所属・部分の用法が中核となり、他方、もともと持っていた分離や根源の意味はしだいに *from* に取って代わられる。しかし *from* と同じ起点を表す用法は現代英語でも複数残っている。Lindstromberg (2010: 210–211) から具体例を引用する。

- (6) a. Do s'thing of your own will  
b. That was kind/silly/stupid of you  
c. Be tired/ashamed/frightened of x  
d. Take advantage of sb  
e. Take leave of someone  
f. Cure sb of a disease

そして本稿でとりあげる (3) から (5) の構文も実はかつて *of* の領域だったところに *from* が分け入る形で入り込んできたために、*of* と *from* が混在している。(3) の場合、材料と原料という区別を認めたとしても *of/from* の目的語が起点であり、それが変化し、製品ができていくという点では同じ過程を表示している。(4) の場合も同様で、(4a), (4b) どちらにしても *death comes from starvation/cancer* という起点、着点の関係は同一である。(5) でも

分離の意の of が生き残っているものの、現代英語では from が of と入れ替わろうとしている、と Lindsromberg は現状分析をする。

それでは (3)～(5) のペアの構文について区別する立場、同一視する立場をまとめておく。以下では便宜上、ペアの構文を区別する場合に of 構文と from 構文という用語を使う。まず (3) の made of と made from について LDOCE5 は次のように区別する。

- (7) a. Use **made of** when the original materials have not been completely changed and you can still see them.
- b. Use **made from** when the original materials have been completely changed and cannot be recognized.

(3) の例文に即して言う、(3a) では材料である木材をテーブルに加工しても、元の木材の状態を維持し別の素材に変わるという変化は生じていない。これに対し (3b) の木材から植物繊維を取りだし、紙をすき、乾燥させるという過程を経て紙が作られる。紙をみただけで原料である木材を推測するのは難しい。

上記の区別派に対し、柏野 (2010: 44-45) は、この使い分けは一般的な傾向に過ぎないとし、次のような例文についてネイティブ・スピーカーの判断は、of, from の両方が可能であるという。

- (8) a. This vase is made of/from Czech crystal.
- b. This table is made of/from many different types of materials.

同様に安藤 (2005: 648-650) は、小麦粉が材料とも原料とも解されるので、of と from の両形が観察できるという。

- (9) a. She mixed a batter made of flour, eggs, and water.  
(Longman Language Activator 2002: 227)
- b. bread: a type of food made from flour and water that is mixed together and then baked.  
(LDOCE5 2009: 192)

パンの材料を説明している点では同じであるにもかかわらず、made of/from を取り立てて使い分けていない。

die of/from へ議論を移すと、少し古い文献ながら Longman Dictionary of Phrasal Verbs (1983) [LDPV] が次のような用法の違いを指摘する。

- (10) die of: to die because of (something, such as an illness or feeling)
- die from: to die following (something, except illness or feeling)

die of 構文の例文で死亡原因は、hunger, grief, a fever という病気や感情という内的要因である。同様に die from のそれは、lack of food, wounds, her fall out of the high window と

いう死亡者の体外の要因である。die の主語との一体感を表す of, die の主語と距離があり, その起点を表す from という基本的意味を考慮すると, こうした of と from の目的語の区別はそれなりの説得力を持つ。

他方, 現在多くの辞書, 語法書が of と from の目的語に区別を見いださない傾向にある。本格的な英語語法書小西 (2006: 400-401) では, 「しかし実際には of と from の区別はそう厳格なものでなく, 互いに転用している。どちらの原因の場合も, 一般に die of が好んで用いられる。」と述べる。made of と made from の区別をたてる LDOCE5 は, die [+of/from] と 2 前置詞を並列しつつ, 用法を分けることはしていない。用例をみると, die of starvation in the snow と dying from cancer をあげる。starvation は lack of food の結果, 生じた hunger 状態をさすので, 内的・外的要因といえる。cancer は体内の異常であるから内的要因と考えられるけれども, from cancer と from が使用されている。

(5) の expect sth of/from sb について言及する Lindstromberg (2010: 211) によれば, (5a) の構文を取る動詞は expect 以外に require, want, ask, beg があり, この of が from により, 徐々に取って代わられつつある。次の Google 検索ヒット数を参照。

- |                                    |                      |
|------------------------------------|----------------------|
| (11) a . What do you expect of me? | [ca. 300, 000 hits]  |
| b . What do you expect from me?    | [ca. 1 million hits] |

後からみるように (3), (4) については依然 of 構文のほうが高頻度あるが, (5) に関しては from 構文が勢いを増していることが読み取れる。また Lindstromberg は of 構文のほうが, 形式的な文体でやや古めかしいという。但し, LDPV は, ask of, demand of, expect from, request from, require of と動詞の見出しで of と from を使い分けている。こうした動詞個々により of から from への交替進度が異なる可能性は十分にありうる。また LDOCE5 は, expect a lot of sb/expect too much of sb というコロケーションを載せている。つまり高頻度で繰り返して使用される語句では from という新しい前置詞ではなく, 古い形の of が生き延びていること示しているといえる。

### 3. made of/from

ここからは British National Corpus (小学館コーパスネットワーク) で (3) から (5) の構文の頻度および共起する目的語の頻度を調べる。まず be made of と be made from の比較である。BNC で頻度をみると, of 構文が2781例, from 構文が1557例検索できる。確かに頻度では of 構文が多く生起する。他方, made と of/from について, 共起関係の有意性の指標となる t-score をとると, from 構文が31.02, of 構文が7.64 という数字が得られ, from 構文の共起関係の高さが際立つ。

次に, made of/from の直後に原料材料が来る場合に, 上位20位までに並ぶリストを作る と以下のようなになる。

## (12) made of/from 直後の原材料上位20語

made	of	wood	68	from	wood	11
		plastic	29		glass	9
		gold	25		plastic	7
		metal	24		copper	6
		sterner (stuff)	21		aluminium	5
		stone	19		carbon	5
		iron	17		clay	5
		steel	17		cotton	5
		glass	16		alder	4
		lead	13		nylon	4
		brass	12		blood	3
		concrete	10		brass	3
		copper	9		coal	3
		ivory	9		grapes	3
		paper	9		layers	3
		rubber	9		lead	3
		leather	8		mahogany	3
		silk	8		oak	3
		silver	8		paper	3
		brick	7		rubber	3

この表から読み取れる第1の点は、頻度差はあるものの、made of/from ともに wood が最高頻度であることである。そこで made of/from wood の実例を検討すると made from の後には wood, leather, and large, hollowed-out seed-pods のように複数の原材料が列挙されることが多く、11例中6例がそうである。made of についても、made of wood, glass and some sort of metal のように材料を並べる例もあるので、made of/from は共通している。第2に、made from の下位に alder, mahogany, oak と木の名前が並ぶので、これが made from に特徴的な目的語だと言いたくなるが、made of mahogany が2例、made of oak が3例 BNC に含まれているので、from+木材とは言いきれない。

made of/from の直後に3回以上観察できる原材料リストを比べると、made from 25原材料のうち、17は made of でも共有されている。残りの made from のみ共起する8原材料を整理すると

## (13) made from +材木: alder, mahogany, timber

+化石燃料: oil, coal

+果物: grapes

+生地: ripstop

+体液: blood

このうち、made of に続く mahogany が2例、timber が1例、coal が1例ある。残りの共起語についてインターネットからの検索数を記す。

- (14) made of alder (ca. 341,000 hits) vs. made from alder (ca. 1,220,000 hits)  
 oil (ca. 1,060,000 hits) vs. oil (ca. 1,640,000 hits)  
 grapes (ca. 3,840,000 hits) vs. grapes (ca. 3,740,000 hits)  
 ripstop (ca. 371,000 hits) vs. ripstop (ca. 1,860,000 hits)  
 blood (ca. 1,100,000 hits) vs. blood (ca. . 568,000 hits)

これらの検索数から、made from に限定された原料を見つけ出すのが困難であることが明らかである。

made of/from の後にくる 2 語、あるいは 3 語という範囲で共起語を探し、かついわゆる原材料以外のコロケーションを集めると (15) が得られる。

(15) 抽象的な made of/from

made	of	sterner stuff	21	from	the general office	4
		the fact	11		a decision of	2
		the right stuff	9		a year of spending restraints	2
		the effect	7			
		the impact	5			
		the local authority	5			
		the number	5			
		language	4			
		the importance	4			
		the information	4			

be made of sterner stuff で ‘to have a strong character and be more determined than other people to succeed in a difficult situation’ (LDOCE5) の意をいうイディオムを形成している。同様に、made of the fact は much has been/was made of the fact that ... という強力なコロケーションの一部である。さらに be made of the right stuff も「～にうってつけだ」という固定表現である。次の made of the effect については “Mr. Flynn To ask the Minister for the Arts what recent assessment has been made of the effect on attendance figures of the introduction of admission charges to museums” というイギリス国会議事録の用法が典型例である。以上のように made of が固定表現や形式的な受動態で使用されている。このような用法は made from では皆無ではないが、made of の生産性に比べると、その使用頻度は低い。

#### 4. die of/from

die については、「死ぬ」という意味だけの die を検索したいので died of と died from という形式で検索をする。その結果、of 構文が 703 例、from 構文が 400 例という粗頻度を得る。made of/from の時と同じように、t-score をとると、of 構文が 13.18、from 構文が 17.52 と、from 構文の方がより有意な共起度を示す。さらに共起度をはかるために loglog スコアもみると、from 構文が 26.05、of 構文が 9.38 と差が開くことから、from 構文の共起が of 構文のそれに比べて高いと言える。

次に died of/from 直後で死因名詞として目的語の位置を占める語の一覧を以下に示す。表 (16a) が与えている情報は die + of/from + 死因の順位, 粗頻度, 100万語あたりの相対頻度である。

(16) a. die の死因 (単一語)

1	79	11.24	died	of	cancer	1	9	2.25	died	from	cancer
2	22	3.13	died	of	pneumonia	2	8	2	died	from	aids
3	20	2.84	died	of	aids	3	5	1.25	died	from	injuries
4	16	2.28	died	of	starvation	4	5	1.25	died	from	pneumonia
5	9	1.28	died	of	leukaemia	5	5	1.25	died	from	smoke
6	9	1.28	died	of	shock	6	4	1	died	from	lead
7	8	1.14	died	of	hunger	7	4	1	died	from	shock
8	8	1.14	died	of	typhoid	8	3	0.75	died	from	burns
9	7	1	died	of	wounds	9	3	0.75	died	from	carbon
10	6	0.85	died	of	cold	10	3	0.75	died	from	heroin
11	6	0.85	died	of	exhaustion	11	3	0.75	died	from	illness
12	6	0.85	died	of	fright	12	3	0.75	died	from	starvation
13	6	0.85	died	of	hypothermia						
14	5	0.71	died	of	disease						
15	5	0.71	died	of	exposure						
16	4	0.57	died	of	asthma						
17	4	0.57	died	of	consumption						
18	4	0.57	died	of	drink						
19	4	0.57	died	of	dysentery						
20	4	0.57	died	of	injuries						
21	3	0.43	died	of	asphyxia						
22	3	0.43	died	of	asphyxiation						
23	3	0.43	died	of	cholera						
24	3	0.43	died	of	coronary						
25	3	0.43	died	of	fever						
26	3	0.43	died	of	typhus						

of 構文の方が高頻度である点はいうまでもない。それでも上位 4 語の死因については、両構文で死因に上がっている。そしてこうした頻度が die of と die from の区別があまり厳密でないという観察につながると推測できる。逆に相違点を求めると、ギリシャ語・ラテン語から借用された病名すなわち, leukaemia, typhoid, hypothermia, asthma, consumption, dysentery, asphyxia(tion), cholera, coronary, typhus が of 構文だけで登場している。病名というくくりでは, die of と die from は同じ扱いとなっているけれども, 専門用語としての病名となると die of が圧倒している。

表 (16a) は die of/from 直後の死因 1 語リストであるが, 死因を 3 語の幅まで広げ作成した死因覧を次に示す。幸いにも, 表 (16a) のリストでは見えない死因の共通点, 相違点を見いだすことができる。

(16) b. die の死因 (複数語)

1	70	of	a	heart	attack	1	9	from	a	heart	attack
2	8	of	a	broken	heart	2	8	from	head	injuries	.
3	6	of	a	brain	tumour	3	6	from	multiple	injuries	.
4	4	of	a	brain	haemorrhage	4	5	from	the	disease	.
5	4	of	a	suspected	heart	5	4	from	head	injuries	after
6	4	of	cancer	of	the	6	3	from	a	fractured	skull
7	4	of	lung	cancer	.	7	3	from	a	single	stab
8	4	of	natural	causes	.	8	3	from	carbon	monoxide	poisoning
9	3	of	a	drug	overdose	9	3	from	his	injuries	.
10	3	of	aids	in	the	10	3	from	natural	causes	.
11	3	of	an	industrial	disease	11	3	from	smoke	inhalation	.
12	3	of	injuries	after	the						
13	3	of	multiple	injuries	.						

表 (16a) と軌を一にするかのように, die of/from の複数語死因第一位は heart attack で, 共通である。しかしながら, その下の死因をみると, of 構文が内的要因, from が外的要因という区別も決して的外れではない, という意見を持ちたくなる。(16) の of に後続するのは13例中10例がいわゆる病気である。対照的に from の例では, ケガが6例, ガス中毒が2例という体外的要因である。die from に後続する内的要因 natural causes, heart attack, disease, die of と共起する外的要因 drug overdose や injuries という例外を認めつつ, 残りの大部分の死因は die of + 病気, die from + 病気以外といえる。

## 5. expect sth of/from sb

3, 4 の動詞 made, die と of/from は連続している動詞句なので, 検索が比較的容易である。ところが expect sth of/from sb の場合, 動詞の of/from の間に目的語が入るので, 網羅的検索をしがたい部分がある。そこで本稿ではまず what \* expect of/from という検索式に基づき, (5) の例文パターンで助動詞・主語に制限をつけず実例を BNC 調査する。その結果

(17) what \* expect of: 22 例, 内訳は what to expect of 10 例, what 主語 expect of 12 例  
 what \* expect from: 35 例, 内訳は what to expect from 20 例, what 主語 expect of 15 例

総数で from 構文の方がすこし多いくらいで, 際だった相違は見られない。次に, expect sth from sb と expect sth of sb というパターンが expect のパターン全体に占める割合を, LDOCE5 (2009: 591) が横棒グラフで提示している。それによれば, from 構文が 2, 3 %, of 構文が 1, 2 % という比率で, 頻度で大きく異なることはなさそうである。

しかしながら, expect に後続する目的語を精査すると, of 構文と from 構文は歴然とした違いを見せる。(18), (19) の表内には expect の目的語とそれぞれの頻度を記している。



## (18) expect sth of sb

expect 1 語 of sb	expect 2 語 of sb
better 1	any better 1
everything 1	any less 1
it 3	anything better 1
more 5	anything else 1
much 2	anything more 1
nothing 1	big things 1
something 1	different things 1
that 1	great things 1
this 2	so much 4
	too much 12
	very much 1

## (19) expect sth from sb

expect 1 語 from sb	expect 2 語 from sb
anything 2	a lead 2
assistance 4	any help 3
change 2	great things 2
food 2	higher standards 2
help 3	little sympathy 2
it 3	no help 2
little 3	solid/substantial support
miracles 2	too much 9
more 3	
much 3	
support 4	
that 3	
this 2	

(18) と (19) を比較すると、明らかに expect の of 構文では目的語が限定されているのに対し、from 構文は of 構文と一部共通部分を含みながらも多様な目的語を取っている。from 構文の (19) では、目的語が多岐にわたるために頻度 1 の 19 例は省略している。もうすこし説明を加えるならば、of 構文の 1 語目的語は代名詞と数量詞だけである。2 語目的語でも things という代名詞に近い目的語が増えただけで、普通名詞が全く観察できない。対照的に from 構文では、数量詞・代名詞だけでなく、assistance や help, support のような援助を表現する普通名詞が並ぶ。

(18), (19) の expect too much という高頻度目的語は注目すべき特徴を見せる。この動詞パターンは、expect [too much] [of/from sb] という expect 本来の構造から、expect [too much of] sb/sth という構造に再分析されていると考えられる。その証拠の 1 つが、of/from の目

的語の種類の変化である。すなわち、of/from 人という expect の本来の用法に加えて、of/from のあとに sth が来ている実例が豊富にある。

- (20) expect too much of: a chance meeting, it, music, only one marriage, schools, the new system  
expect too much from: a promising development, it, means of mass communication, that, the  
evidence of excavations, the new states, the joint collaborative  
structures

schools や states はその組織の中に人間が想定されるので、メトノミー的拡張がなされているという説明が可能かもしれない。しかし他の例も考慮すると、expect too much of sth という新しいパターンが生まれているとすべきであろう。もう 1 つの証拠は次の文である。

- (21) You probably expect too much of yourself. (BNC, 252BP9)

expect too much of が take care of のように of 以下に目的語をとる複合動詞と考えれば、目的語の位置に yourself が生起するのは自然な現象として記述できる。

## 6. 結 論

本稿では、of と from が競合する構文として (3) から (5) につき、その前置詞目的語データを BNC コーパスから収集し、比較することで、多くの先行研究が指摘するように of 構文と from 構文の差がなくなりつつある姿を描いた。ただその一方で、of と from は種類が異なる目的語を取るケースがまだあるという事実も指摘した。現代英語で意味的透明度が高い from が of の領域に侵入しつつも、従来からある of 領域の独自性はまだまだ守られているというのが、本稿の結論である。

## 参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 東京：開拓社  
Courtney, Rosemary (1983) *Longman Dictionary of Phrasal Verbs*. Harlow: Longman.  
井上永幸・赤野一郎 (編) (2013) 『ウィズダム英和辞典』 東京：三省堂  
柏野健次 (2010) 『英語語法レファレンス』 東京：三省堂  
小西友七 (編) (2006) 『現代英語語法辞典』 東京：三省堂  
Lindstromberg, Seth (2010) *English Prepositions Explained*. Amsterdam: John Benjamins.  
*Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th edition. Harlow: Pearson Education. [LDOCE5]  
Wild, Kate (ed.) (2012) *Collins COBUILD English Usage*. 3rd edition. Glasgow: HaperCollins.